

関東大震災の体験記に見る流言受容の心理

—和辻哲郎「地異印象記」を中心に—

栗原 健

1. はじめに

1923年9月1日の関東大震災直後に発生した朝鮮人虐殺については、すでに数多くの研究がなされており、その悲惨な実態に徐々に光があてられつつある。「朝鮮人が井戸に毒を入れている」「爆弾を投げて放火している」といった流言が拡大したプロセス、警察・軍隊の関与、内務省警保局電文が及ぼした影響、朝鮮人の独立運動に対する苛立ち、在郷軍人が果たした役割など、虐殺を構成する諸要素については今後一層の史料の収集と精査、分析が続けられることが期待される。

しかしながら、未だ十分な説明がなされているとは言い難い点は、流言を信じた被災者の心理メカニズムである。江馬修は、自身の震災体験に基づいて著した小説『羊の怒る時』（1925年）の中で、「この恐ろしい天変地異に対して持って行きどころない市民の憤懣と怨恨が、期せずして朝鮮人の上にはけ口を見出した」との言葉を挿入しているが、総論としてはこの表現に間違いは無いであろう¹。朝鮮独立運動に関する新聞報道や在郷軍人の言葉から、「鮮人ハ吾人同胞ノ仇敵」、隙あらば日本人に危害を加えようと狙っている悪党の群れという警戒心が民衆の間に広がっており、大地震のショックと興奮がこの敵愾心を一気に爆発させたことは確かである²。しかしながら、差別感情から虐殺へと一気に飛躍した際の心の動きには、具体的にどのような要素が見られるのであろうか。将来に同様の暴力が発生するリスクを減らすためにも、この点についてさらなる解明が望まれる。

一体、人はどのような環境に置かれた時に流言を信じやすくなり、自己の内面に抱えるレイシズムなどに対して抵抗力を失うのであろうか。無論、関東大震災の被災者全員に共通する結論を見出すことは不可能である。暴行に参加した者に限っても、被災状況、流言を聞いた環境、朝鮮人との接触体験は千差万別であり、彼らの心理状態を再構築するには史料が乏しい。しかしながら、若干の体験談から現代の災害心理にもあてはまる要素を抽出することは可能であり、今後の研究の足掛かりとすることはできよう。外国人排斥の動きが強まっている今日の日本の状況を考えると、マイノリティを標的としたフェイクニュースを信じてしまう「心の落とし穴」について理解を深めるこ

¹ 江馬修『羊の怒る時—関東大震災の三日間』筑摩書房、2023年、176頁。原文では「朝鮮人」は伏字になっている。

² 「鮮人ハ吾人同胞ノ仇敵」は、9月5日に寄居で具學永を殺害した在郷軍人が裁判で語った言葉。関原正裕「埼玉の自警団事件と国家責任」『関東大震災—100年の今を問う—虐殺否定・歴史改ざんを許さず』関東大震災朝鮮人・中国人虐殺—100年犠牲者追悼大会実行委員会編、日本経済評論社、2024年、148頁

とは重要であり、小さなヒントであつてもおろそかにはできない。

本論では、哲学者の和辻哲郎（1889年～1960年）が自らの被災体験を生々しく描いた「地異印象記」（『思想』1923年11月）を中心に、災禍の衝撃から流言に動かされて行く心の動きを追い、なぜ和辻が朝鮮人来襲の噂をあっさりとして信じてしまったのか、その心理的要因を考えたい。また、和辻とは異なり流言を信じなかった寺田寅彦（1878年～1935年）や秋山清（1904年～1988年）、流言に疑念を持ちつつも暴力に手を貸しかけた染川春彦（藍泉、1879年～1934年）などの記述を見ながら、「見る」ことが必ずしも真実を把握することにつながらず、かえって誤解を強めてしまうことがあるという危険性に注目する。最後に、朝鮮人に対する日本人のやましさが流言の背景にあると示唆した水島爾保布（1884年～1958年）の文章を取り上げ、内心の恐れの影響が攻撃性に転化する可能性について考えたい。なお、引用するテキスト中の旧字体の漢字は新字体に改めた。

2. 「地異印象記」に見る流言受容の心理（1）

和辻哲郎の「地異印象記」は、災禍の中で刻一刻変化する自分の心情を詳細に描いた稀有な震災体験記であるが、この手記はすでに、流言に関する2つの研究で取り上げられている³。ただしそれは朝鮮人との関連よりも、震災発生後まもなく東京の空に現れた巨大な雲に対する和辻の関心による部分が大きい。ここには、次々に耳に入る噂に揺れ動く一個人の姿が描かれており、流言を信じてしまう心情が活写されている。

震災が起きた直後、和辻は千駄ヶ谷の自宅の庭に家族を避難させたが、その際、南の方から3回ほど「大砲のような大きい爆発音」がするのを聞いた。遠くに見える火事の様子を見に出かけた彼は、「印半纏の職人風の男」から「大島爆発の噂」を耳にする。実際、和辻は南方に「真っ白な入道雲がひとときわ高くムクムクと持ちあがり、それが北東に流れて、もう真東の方までちょうど山脈のように続いている」のを見た。この短時間のうちに大島の噴煙が東京まで流れて来たことに疑問を感じつつも、「ほかにこの雲に対する説明の仕方が思いつけなかった」ため彼は納得し、「あの爆音はなるほど大島の爆発の音なのだと考えた」と記す⁴。

不思議な反応である。和辻が出会った印半纏の男は、偶然近所を歩いていた職人であろう。起きたばかりの地震に関しては、和辻と同程度の情報しか持ち合わせていない筈であり、震源のことなど知りようがない。大島噴火という解釈も、通りすがりの他の者から聞いた噂の受け売りだと考えられる（大島の噂は東京各地で語られ、寺田寅彦の耳にも入ることになる）。正確な情報など期待すべくもない相手の説を、和辻はなぜ真面目に受け取ったのだろうか。

和辻の手記を読み込んだ中丸憲一は、この点について防災心理学者の矢守克也の言葉を引用する。人間にとって最も耐えがたいことは、説明が存在しないゼロの状態に置かれることであり、そ

³ 中丸憲一「“災害流言” 誤情報・偽情報に備えるために～関東大震災から考える～」『放送研究と調査』第74巻9号、2024年、32-66頁；佐藤健二「関東大震災における流言蜚語」『死生学研究』第11号、2009年、45-110頁。

⁴ 和辻哲郎「地異印象記」『和辻哲郎著作集』第20巻、岩波書店、1963年、33頁。

のままでは不安を掻き立てられる。流言は「基本的に全部、それ〔栗原注：ゼロの状態〕を埋めて補い、説明するために出てくるもの」であり、ストーリーが無い状態に耐え続けるよりは、人は偏った内容であっても説明が存在することを欲するのである⁵。和辻が大島噴火という解釈を信じたのも、巨大地震の直後に「ノーストーリー」の状態にいる不安を埋めるためだったとすることができる⁶。タモツ・シブタニは流言のことを、「あいまいな状況とともに巻き込まれた人々が、自分たちの知識を寄せ集めることによって、その状況についての有意な解釈を行なおうとするコミュニケーション」と定義しているが、和辻と職人の会話はまさにこの行為にあたる⁷。

和辻はその後も雲の様子を気にし続ける。2時間ほど後、東北の空に「さらに一層大きい入道雲」が現れ、雷鳴のような轟きも聞こえ始める。大島の噴煙とは別のものである筈であり、和辻は再び情報を求めて街路に出て行く⁸。そこで彼は「南の方のは目黒の火薬庫の爆発の煙であり、東北の方のは砲兵工廠の爆発の煙である」との話聞き、この解釈を「いきなり信じた」。「大島の爆発よりもよほど合理的に思えた」からであるが、実際にはどちらも誤報であった⁹。「いきなり信じた」という強い表現に、情報の空白を避けるために手近な情報で埋めようとする姿勢が表れている¹⁰。後に和辻は、この「いきなり」を朝鮮人に関する流言を聞いた際にも繰り返すことになる。

相変わらず雲を意識してしまう彼は、2時間ほどして再び出かけて行き、避難民から各地に広がる大火について聞かされて愕然となる。入道雲が火災の煙である可能性を初めて意識し、不安をおぼえたのである。畑に蚊帳を吊って子どもを寝かせた後、和辻は遠くに広がる火炎を呆然と見ながら夜を過ごした。「我々はいじけた心でこの火の小さくなる事をのみ念じていたが、火はむしろだんだん盛んになりひろがって行くように思えた。(略)この調子では何物も残さずに焼くであろう。人力ではもういかんともすることができない。」¹¹無力感がにじむ言葉である。

和辻に限らず、闇夜に燃え続ける大火の光景は、多くの被災者の脳裏に深く刻みつけられた。少なからぬ震災体験記に、この夜間の恐怖が記されている。

「全く夜に入ってから、紅蓮天を焦してその凄愴言うばかりない。二階からこの大焦熱図を眺めていると、大叫喚の音が耳に近く、己の影法師が障子に黒々と映って、思わず全身に粟を生ずるのを覚えた。」(大曲駒村)¹²

⁵ 中丸、36-37頁。

⁶ ただし、和辻は「それを受け容れる心持には、我々に最も近い桜島の爆発の知識が働いていたように思う」と冷静に書き添える。1914年1月の桜島大噴火の新聞報道の記憶があったために、噴火説がもっともらしく思えたのではないかと自分なりに解釈しているのである。和辻、33頁。

⁷ タモツ・シブタニ(広井脩・橋本良明・後藤将之約)『流言と社会』東京創元社、1985、34頁。なお沼田健哉によると、流言は「一般的に地位の低い者から高い者の方へと流れる傾向がみられる」という。社会的身分で言えば、この構図は和辻の会話にもあてはまる。沼田健哉『流言の社会心理学』『桃山学院大学社会学論集』第22巻、1989年、105頁。

⁸ 和辻がたびたび情報を求めに出て行くことについて、佐藤健二は「自ら話すことで不安を紛らわしていたとも解釈しうる」と指摘する。佐藤、77頁。

⁹ 和辻、39-41頁。

¹⁰ 「いきなり」の語の性格については以下を参照。茨木伸介『『いきなり』の用法』『同志社国文学』第54巻、2001年、56-50頁。

¹¹ 和辻、41-42頁。

¹² 大曲駒村『東京灰燼記-関東大震災』中央公論社、1981年、31頁

「空という空はまっかにそめられた。自分の家から一步もはなれる元気はなかった。こののちどうなる事かとそればかりが心配であった。ほとんど見当がつかなかった。たゞ恐ろしいという感じのほか何もなかった。寝る事などはてんでできそうもなかった。ただもう早く夜が明けてくれ、ばい、とそればかりの願であった。夜が明ければどうにかなるだろうとそのときは思っていた。」(石井友寿)¹³

「夜が来る。東から南かけて天が紅に映えて来る。電灯も来ない。水道も来ない。瓦斯も来ない。電車もない。一体どうなることなんだろう。(略)

夜は更けて行く。疲れた人の子の群は、次第に口少なくなっていく。一体どうなるのだろうと思ひつゝも。」(石田英一郎)¹⁴

「一体どうなるだろう」という言葉の繰り返し、延焼を恐れている人々の心配を象徴している。この極度の不安とストレスが、翌日に爆発的に広がる朝鮮人関連の流言の下地となるのである¹⁵。

3. 「地異印象記」に見る流言受容の心理 (2)

翌2日の状況は、和辻の焦りをますます強めるものであった。往來には火災から逃げて来たらしい避難民が通り過ぎて行き、彼は「やがて自分たちもあはして逃げなくてはなるまいという恐れ」を感じて「いよいよ大火の惨状が現実として迫って来た」と思う¹⁶。軍隊が消火に努めているという情報も、彼には慰めにはならなかった。延焼の可能性だけでなく、食糧不足に対する心配も募っていた。その重苦しい場、それも再び陰鬱な夜が近づいて来た夕刻に、新たな流言が彼に届いたのである。

そういう不安な日の夕ぐれ近く、鮮人放火の流言が伝わって来た。我々はその真偽を確かめようとするよりも、いきなりそれに対する抵抗の衝動を感じた。これまで抵抗し難い天災の力に慄え戦っていたのであったが、この時に突如としてその心の態度が消極的から積極的へ移ったのである。自分は洋服に着替え靴をはいて身を堅めた。米と芋と子どものための菓子とを持ち出して、火事の時にはこれだけを持って明治神宮へ逃げろと言いつけた。日がくると急製の天幕のなかへ女子供を入れて、その外に木刀を持って張り番をした¹⁷。

この記述は重要である。ここで和辻が噂の真偽を考慮することなく「いきなり」武器を持つ衝動にかられたことは、何故だろうか。和辻自身の言葉に示唆されているように、それまで圧倒的な自

¹³ 石井正己「エリートたちの関東大震災—第一高等学校『大震の日』『震災を語り継ぐ：関東大震災の記録と東日本大震災の記憶』石井正己著、三弥井書店、2023年、169頁。

¹⁴ 同、165頁

¹⁵ 警視庁編『大正大震災災誌』によると、朝鮮人に関する流言は9月1日15時頃の「社会主義者と朝鮮人の放火多し」が最も早いものであり、翌2日10時の「『不逞鮮人』の来襲あるべし」以降、急激に増加して行くことになる。佐藤、92頁。

¹⁶ 和辻、42頁。

¹⁷ 同上、43頁。

然の脅威に対して無力な状態に置かれて来たところに、突然自力で立ち向かえるレベルの脅威が登場したことによって、自らの行動で事態を改善できると思う自己効力感を取り戻したためと考えることができる。「天幕のなかへ女子供を入れて、その外に木刀を持って張り番をした」という文からも、それまでの受身的な状態を脱して家長として家族を守る力を発揮できるという、家父長意識の高揚感が伝わって来る¹⁸。「どうなるだろう」と不安に苛まれて自らの弱さを痛感していたところに、自己の力を再確認できる機会を提供する流言が届いたことが、和辻を含めて多くの人々が流言を信じた大きな要因と言えるのではないだろうか¹⁹。

まもなく、青山に住んでいた臨月の義妹が、「放火で物騒だ」と言いながら駆け込んで来る。後から彼女の荷物を抱えて来た若者たちが「火を消して、火を消して」と叫んだため、和辻らは「もうすぐそこにつけ火や人殺しが迫って来たのだ」と思い、「こうして我々は全市を揺り動かしている恐慌にたちまちに感染した」のであった。いったん流言の一部を裏付けるように見える出来事に遭遇してしまうと、その全てが正しいもののように思えて来たのであろう。夜の間、「何者かを追いかける叫び声が諸々方々で聞こえた」が、和辻はそれを「天災で委縮していた心が反発し抵抗する叫び声であった」と書く。近隣の自警団の者が朝鮮人を駆り立てる声、ことによると殺害する声でもあった筈だが、和辻は曖昧な書き方でお茶を濁している²⁰。

流言研究においてしばしば引用される公式に、ゴードン・オルポートとレオ・ポストマンによって定式化された「 $R \sim i \times a$ 」がある²¹。「流言 (R) が流布する量は、それに関係する人々にとっての問題の重要性 (i) と、その論点に関する証拠のあいまいさ (a) の積に比例する」とするものであるが、和辻の場合、それまで丸 1 日以上延焼の不安に怯えていたところに放火の危険が伝えられたのであるから、重要性は一気に跳ね上がった状態である。しかも目に映る光景、耳にする声は全て断片的であり、自分が置かれている状態も十分把握できない。和辻にとってこの数時間は、流言に対する「被暗示性 (suggestibility)」が著しく高い状態であったと想像できる。

幸い、3 日零時を回る頃には延焼の危険は遠のき、明け方には炎も見えなくなった。安心した和辻は親類や友人を訪ねようと考え、焼け落ちた街に踏み込んで行く。ここで彼はにわかには同胞愛の興奮をおぼえ、涙を流し始める。被災者の苦しみを見るにつけ、「自分はその苦しみを共にわかたずにいられない切迫した心持ちになった。」同時に彼は、「町全体に渦巻いている純粋な人間の情緒への感動」にかられ、「人々はただ苦しみと苦しみを救おうとする心とのほかに何物も持っていない」と心を揺さぶられる。「通りすがりにちょっと小耳にはさむあるやさしい一語でもが、すぐに新しい涙をさそう。」²² いわゆる「災害ユートピア」と呼ばれる状態であろう。災害の後に被災者

¹⁸ 自警団の行動とジェンダー意識の関係については以下を参照：金富子「関東大震災時の「レイビスト神話」と朝鮮人虐殺：官憲史料と新聞報道を中心に」『大原社会問題研究所雑誌』第 669 号、2014 年、1-19 頁。

¹⁹ なお、和辻は「自分は放火の流言に対してそれがあり得ないこととは思わなかった」と記す。「ただ破壊だけを目ざす頹廢的な過激主義者が、木造の都市に対してその種の陰謀を企てるということは、きわめて想像しやすいからである」というのがその理由である (45 頁)。また、「自分は放火爆弾や石油、揮発油等の所持者を捕えられた話をいくつか聞いた。そうして最初はそれを信じた」(46 頁) とあるように、流言に動かされていたことを別段隠していない。

²⁰ 和辻、44 頁。

²¹ シブタニ、87 頁；沼田、101 頁。

²² 和辻、44-45 頁。

同士がしばしば感じる、見知らぬ者同士で心を開き合い「われわれ」として生き延びようとする、助け合いと利他主義の高揚感である²³。このあたたかな感情は、和辻以外の震災体験談でもしばしば言及されている²⁴。

他方、このユートピアは時として、特定の「他者」を「われわれ」から峻別することによって連帯を強化する排他的な関係性にもなり得る²⁵。人間同士の善意に感激する言葉の後、和辻は直ちに続けて「こういう気持ちの間にも自分の胸を最も激しく、また執拗に煮え返らせたのは同胞の不幸を目ざす放火者の噂であった」と記す。「われわれ」の一体感をより強く体感させるものとして、同胞に敵対する異質の「他者」としての朝鮮人が一層クローズアップされたのであろう。朝鮮人への憎悪は、同胞との助け合いの意識の裏返しであった。

以上が「地異印象記」から読み取れる流言受容の心理メカニズムである。無論、和辻の例は多くの被災者の体験のうちの一つに過ぎず、一般化することはできない。千住で朝鮮人を殺害した土工に関する藤野裕子の研究に見られるように、加害者の行動の背景には、社会的身分の問題や権力関係の葛藤が影を落としていることもあり、心の動きは一様ではない²⁶。しかしながら、巨大災害に対する無力感が「抵抗できる脅威」に対する攻撃に転化する危険性をはらんでいること、連帯を創り出すプロセスの中で一部の者を「他者化」する可能性があることは、現代にもあてはまる共通のリスクである。こうした危険性を日頃から意識しておくだけでも、暴力や差別を阻むために役立つであろう。

4. 流言に対する疑念と揺らぎ (1)

被災者の中には、朝鮮人に関する流言を信じなかった人も多数存在した。同時に、流言を否定しつつも、周囲の状況にあわせて感情が揺れ動いていた人もいる。災害時に流言を信じる可能性は誰にでもあることを考えると、判断の動揺を体験した者の事例から学べることも大きいであろう。ここでは流言に対する合理的な疑念と、そこから離れて流言を信じるほうに傾く心の流れについて注目する。

流言を終始否定していた者の代表格が、物理学者で随筆家の寺田寅彦である。寺田は9月2日午後、浅草から彼の家に避難して来た親戚から、初めて朝鮮人の放火の噂を聞く。「井戸に毒を入れるとか、爆弾を投げるとかさまたまな浮説」も耳にするが、寺田は、「こんな場末の町へまでも荒して歩くためには一体何千キロの毒薬、何万キロの爆弾が要るであろうか、そういう目の子勘定だ

²³ 「災害ユートピア」については以下を参照：レベッカ・ソルニット（高月園子訳）『災害ユートピアなぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』亜紀書房、2010年。

²⁴ 例えば秋山清も、「日頃睨みあってるような他人づきあいには消しとんでしまっ、さアさアお這入んなさい、とどの人たちも、すき間があればテントに入れてくれる、といった気風が生まれていた」「わずかな日時ではあったが、そのようなやさしさと自由とが、ともかく存在したことを忘れてはならない」と記している。秋山清、「関東大震災（三）流言蜚語」『日本の名随筆 95 噂』作品社、第4刷、1995年、100-101頁。

²⁵ 日本人同士の助け合いの裏で朝鮮人が虐殺されていたという二面性については、以下を参照：織田健志「震災と人心－『大正大震災』を手がかりに－」『国士館大学政治研究』第11巻、2020年、241-253頁。

²⁶ 藤野裕子「関東大震災時の朝鮮人虐殺と向き合う－災害時の公権力の共同性をめぐって」『震災・核災害の時代と歴史学』歴史学研究会編、青木書店、2012年、239-252頁。

けからでも自分にはその話は信ぜられなかった」と記す²⁷。科学者らしい判断であるが、この批判的思考の必要性を寺田は翌年、短い随筆「流言蜚語」（1924年）の中で説いている。

この中で寺田は、仮に流言が発生しても、市民が科学的にその内容を検討すれば「流言の卵は孵化しないで腐ってしまう」筈だと述べる。例えば、「井戸に毒薬が投げ込まれた」という流言があったとしても、人を殺せるほど井戸を汚染するためには、莫大な量の毒薬を要することになる。そのような毒薬が平生から準備されていると考えるだけでも「少しおかしい事」であるが、実際にこの毒をまくことはなおさら非現実的であろう。「何百人、あるいは何千人の暴徒に一々部署を定めて、毒薬を渡して、各方面に派遣しなければならない」上に、指定の井戸にたどり着いて適量を投げ込んだ上、溶けるようにかき混ぜる必要がある。爆弾に関する流言についても同様であり、必要な爆弾や人員の数を考慮すればあまりに信じ難い。災害時のように人心に余裕が無い時であっても、そうした合理的な判断をすることできないとすれば、人々に「本当の意味での活きた科学的常識が欠乏している」ことになると寺田は主張する²⁸。

寺田と同様の疑念を抱いた者は、少なからず存在した。後にアナキスト詩人として活躍する秋山清は当時19歳、彼は当時麻布竜土町に下宿していた。山の手では街角で「朝鮮人が大勢集合して渋谷に向かっている」「六本木に向かっている」「青山墓地まで来ている」といった情報が次々に叫ばれていたが、いくら時間が過ぎても近隣に朝鮮人集団の姿は一向に見えない。恐怖を煽る情報が飛び交うだけで、その情報源を誰も知らないのである。うんざりした秋山はその夜（おそらく4日夜であろう）、自警団のテントに入って行き、「鮮人を見た者が誰がいるのか」と問い詰めると、彼らに次のように語った。

朝鮮人が、地震と火事の最中に、あっちこっちから集まって来て、日本人を襲撃するなんてことができるものだろうか。そんな計画があって、その日がちょうど九月一日ときまっても、あの地震で、その計画はめちゃくちゃになる筈ではないか。また井中に毒薬を投げ込む、などといい歩いていた者もあったが、井戸はいったいどこに在るのか。井戸の水はふだん誰も飲んではいない²⁹。（略）朝鮮人だってまさか九月一日に地震が起こって、井戸が必要になることを見通して、井戸に毒を投げ込むなんてそんなことができるものか³⁰。

これには自警団のメンバーも反論することができず、「そうだなあ」と同調せざるを得なかったという。殺気立っていた他の地域であれば、こうした挑戦的な行動をとれば命の危険があった筈であるが、山の手は比較的落ち着いていたのだろうか。ただし秋山は数日後、家主夫婦から、「あんな生意気なことを言うのはこの町内に置いとけない」「あいつ、朝鮮人じゃないか」との声が近隣で出ているため立ち退いてくれ、と迫られることになる³¹。「われわれ」の連帯を維持するために

²⁷ 寺田寅彦「震災日記より」『寺田寅彦全集』第7巻 岩波書店、1997年、376頁。

²⁸ 寺田寅彦「流言蜚語」『天災と国防』講談社、第7刷、2014年、125-129頁。

²⁹ 秋山が住んでいた山の手では、水道の普及が早かったのであろう。

³⁰ 秋山、109頁。

³¹ 同上、113頁。

異質な「他者」を排除する例である。

ここで秋山にとって強みとなった論点は、「実際に朝鮮人の襲撃を見た者がいない」ということであった。だが和辻の手記でも見られたように、実際に事件が存在しなくても「見た」と思ってしまうことが、流言の影響下ではしばしば発生する。目で見ることが確実に正確な判断につながるとは限らないのである。「見た」体験から生じた判断の揺らぎについて、以下に考えて行きたい。

5. 流言に対する疑念と揺らぎ (2)

揺らぎの顕著な例は、十五銀行本店の庶務課長であった染川春彦（藍泉）の体験である。彼の『志んさい日誌』には、流言に対する彼自身の態度の変動が如実に描かれており、興味深い。

震災翌日、銀行から日暮里の自宅に帰宅した染川は、近くの道を通って行く避難民から「朝鮮人が爆弾を投ずる」という噂を聞くが、「風声鶴唳」だと見做した。「如何に多数の鮮人が居るにしても、彼等に爆弾の用意があるべき筈が無い。此の不意に起こった災害を、鮮人が予知することが何で出来るものか」と考えたのである。「現に爆弾を投げ入れたのを見た」という話す人もいたが、染川は火災現場で爆発音を聞いており、「包装した樽や缶の破裂する音であると云ふ確信」を抱いていた。この時点では、彼は「何も知らぬ鮮人こそ好い面の皮であった」と記す³²。

しかしながらその夜、鉄道の線路上で近隣住民と共に野宿していた染川は、青年団のメンバーたちが「井戸の中に劇薬が居ると云ふから、諸君気を注げろよう」と呼びかける声に眠りを破られる。この声に、染川はにわかにな不安にかられる。「これは路傍の無智な人達の噂ではない。苟も青年団で、皆に知らせる必要があると云ふ証左を得たからであらねばならぬ」と考えたのである。巡查や兵士といった官憲の言葉を聞いて噂を信じたというケースは多いが、染川は青年団にもそうした権威を認め、「只もう総てが不安なやうに思はれて来た」のである³³。「不安神」という言葉が飛び出す、不安はまさに憑き物のように心に取り憑くものであった。

翌3日、上野公園の出口広場に通りがかった染川は、「殺せ」「朝鮮人だ」と叫びながら群衆が1人の浴衣姿の男性を棒で殴りつけているのを見かける。この瞬間、彼は前日とは全く異なる暴力的な衝動にかられる。

此奴が爆弾を投げたり、毒薬を井戸に投じたりするのだと思ふと、私もつい怒気が溢れて来た。我々は常に鮮人だと思って、憫みの心で迎えてゐるのに、此変災を機会に不逞のたくらみを為ると云ふのは、所謂人間の道を弁へないものである。此の如きは宜しく此場合血祭りにすべきものである。巡查に引渡さずに殴り殺せと云ふ声は此際痛快な響きを与えた。私も握り太のステッキで一ツ喰はしてやろうと思って駆け寄っていった³⁴。

³² 染川藍泉『震災日誌』日本評論社、1981年、96頁。

³³ 同上、99頁。

³⁴ 同上、105-106頁。

しかし、染川は暴行に加わるのを中止する。あまりに人々が「神経過敏」になっているので、自分も朝鮮人と間違われるかも知れないと危惧したためという。おそらく、群衆の異常な雰囲気を感じて恐怖をおぼえたのであろう。結局、男性は駆けつけて来た兵士によって連行されて行ったが「私は自分の今の荒み切った心に、彼奴が擲り殺されなかったのを惜しいやうに思った」と彼は書き添える³⁵。

ここで注目したい点は、染川は朝鮮人が暴行を受けている光景を見ただけであるのに、自動的にこの男性が「爆弾を投げたり、毒薬を井戸に投じたりする」者だと考えたことである。男性が実際にそのような行動をしたか否かを考慮することもなく、ただ朝鮮人が殴られているというだけで、彼らをめぐる流言が真実であったと納得したのである。昨夜の出来事から増した不安が染川の被暗示性を高めたためと考えられるが、こうした反応は、虐殺の現場でしばしば見られたものであった。

一例として、ある尋常小学校6年生の男子が記した作文を見てみたい。少年は9月2日、東京の街路を歩き回っていたところ、放火犯への警戒を呼び掛ける張り紙を見た。「歩いて行くと、二人の巡査に、両方からつかまえられるながら、ひとりの朝鮮人が、血だらけになって、つれられて行くのにあった。そこで、はじめてこれは鮮人が東京をこの震災を乗じて全滅させようとしているのだとわかった。」³⁶

少年が見たのは、暴行を受けた朝鮮人が連行されて行く姿だけであるが、染川同様、彼にとってこの光景は流言の真実性を立証するものに見えたのである。「何も無ければ、朝鮮人が血だらけにされる筈がない」と無意識下に考えたのであろう。少年には、朝鮮人が犯したという犯罪までもが見通せたように感じたのかも知れない。「わかった」という断言が、現実には存在しないものまで了解してしまう人間の判断力の危うさを示している。

その後まもなく、染川は流言に対する慎重な態度を取り戻す。朝鮮人は9月2日に蜂起する筈であったが震災のため繰り上げたのだ、といった噂を「余りに話が穿ち過ぎてゐる」と片付け、「労働に来てゐる多くの鮮人達が、爆弾や激薬を何うして秘密に貯蔵してゐることが出来るものでない」と、先ほどの殺意を忘れたように寺田のような批評を述べる。続けて彼は、神田橋の崩れぶりを見た時、それがいかにも爆破されたような姿であったため、「鮮人問題を流言蜚語だと信じて居った私でも、これを見た時ばかりは或はと云う疑が起った位であるから」他の者が信じてもおかしくはない、「相当な教養ある人でさえ然りである」と書く³⁷。染川の文は随所でエリート意識が顔を出す、「相当な教養ある」彼が小学生と同じ反応をしていたという事実が、流言の支配力を示している。

似たような動揺の体験を描いているのは、田山花袋（1872年～1930年）の『東京震災記』である。花袋は当初、妻が伝える流言には否定的な態度を示していた。9月3日の夜、自宅裏で「叩き

³⁵ 同上、106頁。

³⁶ この文章は下記の研究の中で引用されている：郭基煥『災害と外国人犯罪流言－関東大震災から東日本大震災まで』松籟社、2023年、94頁。郭はこの文に続き、朝鮮人に対する先入観がこうした反応の根底にあることを分析する。

³⁷ 染川、112頁。

殺せ」と騒ぐ声が聞こえるので出て行くと、「顔から頭から血のだらだら滴っている真蒼な顔をした若い一人の男」が連れて行かれるのを見かけた。男が殺されることを予想した花袋は「気の毒だ」と思うが、他の者から、男が「何かわるいことをしようとしていたのを、運好くつかまえた」ということを聞いて、急に気持ちを変える。同時に、今度は近所に立つガスタンクのことが突然不安になり始めた。朝鮮人がガスタンクを爆破するかも知れないと恐れ始めたのであろう。花袋は大いステッキを持ち出し、提灯で照らして庭先で警備し始めた。

そこへ突然、裏門から1人の男性が入って来ると、「これは、あなたのとこの草履ですか。こんなものがあなたの裏門のところに捨ててありましたから…」と竹の皮の草履を差し出して、立ち去った。花袋も家族も草履には見覚えが無い。しかも男性が何者なのか、家族の誰も知らなかった。些細な出来事であるが、花袋は暗い庭を見回しながら「何か災厄の起こって来る前兆」のように感じて不安に包まれる³⁸。暴行の場面に遭遇したことをきっかけに、花袋の中で被暗示性が高まり、草履ひとつに怯えるほど想像力が暴走したのである³⁹。

6. 暴行の奥底に潜むもの

最後に、流言に動かされなかつただけでなく、朝鮮人に対する暴行の裏面にまで踏み込んだ異色の声に注目したい。水島爾保布（1884年-1958年）の「愚漫大人見聞録」は、流言による混乱などを描いた赤裸々な文章ゆえに発禁処分を受けた幻の震災体験記であるが、最近復刊された。内容は、根岸にある水島宅の近所の人々が災禍の中で、江戸の戯作中の人物たちのようにしゃべり散らした会話を書き連ねたものである。登場人物にはモデルが特定できる者も含まれるため、ある程度のノンフィクション性がうかがえる。

次の会話は、街角で盛り上がる自警団の興奮を、「まるで彰義隊ぢやないか」と醒めた目で眺める住民たちが交わすものである。威勢のいいやり取りの中には、流言の矛盾を突くだけでなく、その背後に潜む「八つ当たり」を見通す批判的精神が含まれており、ユーモアが持つ力を感じることができる（なお、文中の「先生」は国語学者の大槻文彦である可能性が指摘されている）。

『どうも変だぜ。向ふの警戒へ行つて聞きやア三百人〔栗原注：朝鮮人が〕来るつて云ふし、それからその先の四辻のところへ行つて聞きや五百人だつて云つてるんだもの、たった半丁あるなしの間に百五十人が五百人になるやうぢや、この先何万人になるか判りやしない。』と、偵察と称して出て行つた末弟が戻つて来ての報告だ。

『ヨタかな』

³⁸ 田山花袋『東京震災記』社会思想社、1991年、68-75頁。

³⁹ 編集者の木佐木勝によると、震災後まもなく、彼は田山花袋に「夜警をしていたとき、近所をうろついていた朝鮮人が、追われて僕の家庭へ逃げ込んで来て、縁の下へ隠れてしまったんだ。僕はそいつを引きずり出してぶんなぐってやったよ」と言われたという（西崎雅夫編『証言集 関東大震災の直後 朝鮮人と日本人』筑摩書房、第2刷、2023年、151頁）。どの時点での出来事かは不明であり、草履に怯えていた花袋の姿とは相当異なるが、いずれが真であろうか。花袋は真剣な顔でこの言葉を語ったという。

『ヨタだぜ。』

『それ見ろ。』と先生は長髯をしごいた。

『地震の八つ当りを朝鮮人にふり向けてやがる。』と運送屋の親方がいつた⁴⁰。

その後、流言を信じる住民の反論を挟みつつも、彼らの会話は朝鮮人に対する敵愾心の本質を突くものになって行く。いささか長くなるがそのまま引用したい。

『一体鮮人や主義者だつていつてるが、そいつ等が何かしたのを見たつてものは一人もねえぢやねえか』と、西瓜を噛つてゐた車屋のカツさんがいつた。『ねえ親方、幽霊話と同じやうに……。』

『僕アね、こいつア何ぢやねえか、若しかすると、……地震の後があのお前火事よ。な、万一食ひ物の手が廻らなくなつて、暴動でも起るといけねえつてところから、先手を打つたんぢやんえか知ら、……とあつしは考えてるんですがね。どんなもんでせう。』と、親方はいつた。

『さうばかりでもねえさ。僕の考えはかうなんか [だ]。(略) 朝鮮人が今に何かしやしめえか、しやしめえかつて、さういふことを年中腹に思つてピクピクしてゐた者があるとするね。それがこの際ピンと来たんぢやあるめえかと思ふのさ。つまりは神経を起したんさ。こんな事を云ひ触らしやがつた本元はお前、とんでもねえところにありそうだぜ』と、カツさんは西瓜のたねをプツプツ吐き出した⁴¹。

カツさんであれば、暴行の現場を見ても陰謀の証明とは即断しない冷静さを持ち合わせていそうである。興味深いのはその後に語られる、「朝鮮人が今に何かしやしめえか」という不安こそが流言の核ではないかという指摘である。庶民の日常で言えば、日ごろ朝鮮人を侮辱して虐待して来たことに対するうしろめたさが不安を生み、「災害に乗じて報復されるのではないか」という潜在的な恐れを相手に投影した結果、暴力的な「ヨタ」に転化したということになる⁴²。想像された朝鮮人の敵意とは、日本人自身のやましさの投影であったことになる。

この点について、吉野作造（1878年～1933年）が同様のことを小論「朝鮮人虐殺事件に就いて」（1923年11月）で述べていることに注目したい。ある主人が1人の奉公人を虐待していたとして、ほどなく家に放火事件が発生すれば、人々は「この男は虐待されていたのだから主人を恨んでいただろう」と考えてその奉公人を疑うであろう。同様に、「鮮人暴行の流言が伝つて、国民が直にこれを信じたに就いては、朝鮮統治の失敗、之に伴ふ鮮人の不満と云ふやうなことが一種の潜在的確

⁴⁰ 前田恭二編『関東大震災と流言－水島爾保布 発禁版体験記を読む』岩波書店、2023年、63頁。

⁴¹ 同上、64-65頁。

⁴² 中森広道も同様の指摘をしている。中森広道「災害流言の展開とその特性」『消防防災の科学』139号、2020年、37頁。なお水島のテキストには、朝鮮人襲撃の流言を聞いて、「そりやそうかも知れませんよ。(略) 日本人はふだんから朝鮮人をいぢめ過ぎますよ」と主張する中学生（水島の長男）が登場する。彼が流言を信じたのは、虐待されて来た朝鮮人が報復したとしてももっともだと感じたためである。

心になつて、国民心裡の何所かに地歩を占めて居つたのではなからうか」と吉野は問いかける⁴³。国政レベルにせよ一般生活のレベルにせよ、朝鮮人を不当に扱って来たとの意識が流言の根底にあると考えられるのである。

ただし、カツさんの言葉は「こんな事を云ひ触らしやがつた本元」は「とんでもねえところにありそうだ」とまで踏み込んでおり、官憲が流言を利用して暴力を煽ったことを示唆していると読める。戯作のような体裁を取りつつ権力の暗部をつつたこの著作が発禁となったことは、理解できるところである。

7. 結語

北海道胆振東部地震（2018年）や能登半島地震（2024年）の際には、SNSを通じて多くの流言が流れた。このため災害心理学者からは、『災害時には流言が流れる』という事実を、過去の具体的な事例とともにしっかり伝えることが重要」との声が挙げられている⁴⁴。単に「デマに惑わされるな」と呼びかけるだけでは、効果は期待できない。情報の受け手は、それがデマであるとは思っていないからである。そのため、実際に発生した事例を知ることが重要になる。流言には類似したパターンが見られるため、予めサンプルを知っておくことにより、誤った情報に惑わされずにファクトチェックをするよう促すことができるのである。東日本大震災（2011年）については、すでに荻上チキによる『検証 東日本大震災の流言・デマ』（光文社）が刊行されているが、今後の防災教育の現場では、こうした過去の流言の事例が積極的に紹介されることが望まれる⁴⁵。

1923年の朝鮮人虐殺は、一見するとあまりに特殊な事例に思えてしまうが、郭基煥著『災害と外国人犯罪流言－関東大震災から東日本大震災まで』（2023年）に見られるように、関東大震災以来、大規模災害の時には「外国人の犯罪」に関する噂が流れることがしばしばである。このことは、朝鮮人に関する流言が今なお過去のものではないことを示している。実際、「被災地で、外国人が死体の指を切断して指輪を盗んでいる」というよく聞く噂は、1923年には朝鮮人について語られている⁴⁶。こうした事実を知ることが、流言が現実の暴力に転化することを防ぐために有効であろう。

本論で見て来たように、関東大震災の事例は、流言を信じてしまう心理を考える上でも有益な情報を提供してくれる。本論で取り上げた手記の著者たちが体験した心の動きや揺らぎは、いずれも現代の災害時においても体験することがあり得るものであろう。過去の事例を通じてこうした危険性を認識しておくことは、防災について考える上で大きな意味があると信じる。

⁴³ 吉野作造「朝鮮人虐殺事件に就いて」『吉野作造選集』第9巻、岩波書店、1995年、203頁。

⁴⁴ 木村玲欧・岩尾文香「災害時に発生する流言の特徴～過去の災害時における流言事例の特徴分析」*17th World Conference on Earthquake Engineering Conference Proceedings*, No.7f-00011 (2020)、12頁。https://kimurareo.com/images/2021/07/20WCEE_Reo_01_7f-0001_Japanese.pdf (2025年9月3日閲覧)

⁴⁵ 荻上チキ『検証 東日本大震災の流言・デマ』光文社、2011年。北海道胆振東部地震での流言については以下を参照：福長彦彦『「北海道胆振東部地震」と流言の拡散～SNS時代の拡散抑制を考える～』『放送研究と調査』第69巻2号、2019年2月、48-70頁。

⁴⁶ 久米正雄「流言藝術」『久米正雄全集』第13巻、本の友社、1993年、333頁。

Psychology of False Rumors during the Great Kanto Earthquake (1923): Based on Tetsuro Watsuji's *Chii Insho-ki* and Other Accounts

KURIHARA Ken

Immediately after the outbreak of the Great Kanto Earthquake (September 1923), the false rumor, that Korean terrorists were setting fire to the destroyed cities and poisoning wells, spread. In consequence, thousands of Korean people were massacred in Tokyo and the Kanto areas. While much has been discussed regarding the social, economic, and political aspects of the massacre, the psychological mechanism of the mob violence has not fully been analyzed. The purpose of this article is to clarify the psychological factors behind the killings, based on the accounts of the earthquake survivors. The account of Tetsuro Watsuji strongly suggests that the sense of powerlessness, caused by the rapidly spreading fire, intensified the people's anger against the imaginary lesser threat (the Koreans' attack). The shock of the earthquake made people extremely vulnerable to all kinds of baseless rumors. Some survivors, such as Ransen Somekawa, automatically believed the fake news upon seeing captured Koreans, despite the fact that they had no idea whether the prisoners were actually carrying weapons. As Sakuzo Yoshino insisted, the prejudicial fears of the Japanese, which were projected onto the oppressed Korean peoples had to be a significant factor underlying these killings. This history shows that understanding the psychological mechanisms behind rumor-mongering is crucial to prevent future interracial violence.

